

茶道の輪

神奈川県立逗葉高等学校三年（神奈川県）

片瀬 日陽

私が今から話すのは高校生活最後の学生茶会に参加した時のことだ。

私は初めて正客としてお茶席に入り、その時の担当は男子生徒だった。すごく緊張しながら点前を見ていた時、あの先生がその生徒の「帛紗」について説明を始めた。その帛紗は男子生徒のおばあさまが茶道をやっていた時に使用していたものをゆずり受けたということだった。その話を聞いて、いつしか緊張など忘れてその男子生徒の点前に目が離せなくなっていた。一つ一つの動作がすごく丁寧で繊細で、もっと近くで見たいと思ってしまう様な点前で、気づけば私のお茶を点てる所まで進んでいて、力強くお茶を点ててくれた。半東の方がそのお茶を運んで来てくれて、初めて見えたお茶碗の中のお抹茶は会場にいる全員に見せたくなるような綺麗なものだった。そこから感謝の気持ちを込めて挨拶をしてお抹茶をいただいですごく感動したの

を今でも鮮明に覚えている。なぜなら、その男子生徒が点ててくれたお茶はとても優しい味がしたからだ。力強く点ててくれたお抹茶は作法と同様繊細で安心するような美味しさと驚いた。

その時ふと、「一期一会」の言葉を思い出した。この人が点前をし、私がいただいたお抹茶はこの一回限りの特別なものだと思うと、より一層集中し、清らかな気持ちでお茶会を楽しまなければならないと思った。その後からの点前は集中しながらも楽しむことができ、時間の流れが早く感じられた。そしてその短い時間が私にとっては特別で幸せなものとなった。

今回、この学生茶会では多くの事を感じ、考え、学ぶことができたと思う。

男子生徒の使用していた帛紗の話を聞いて、茶道の歴史と人の繋がりが込められた帛紗だと感じた。茶道だからこそ持つ長い歴史を、世代を超えて受け継ぐ事はとても素敵で、おばあさまと男子生徒のように前の人の気持ちや想いを受け継ぐことができたなら尚、素敵だと思う。何かのご縁での一期一会の出会いだったかもしれないが、思い出すたびに、いただいたお茶のように「温かい」気持ちになる。こうして広がっていく茶道の輪は本当に美しく、人の心に残る点前ができるようになりたいと強く思った。